

発症後13年経過しても抗 GAD 抗体が強陽性であった緩徐進行 1 型糖尿病の 1 例

わ だ まさ ゆき
和 田 昌 幸

キーワード：緩徐進行 1 型糖尿病，抗 GAD 抗体，
内因性インスリン分泌能，経時的変化

要 旨

(症例) 77歳男性。(現病歴) 平成7年頃糖尿病を指摘され、インスリン治療を開始、平成12年から当院内科外来に通院中であった。1日3回(超速効型+超速効型混合製剤)のインスリン治療をおこない、HbA1c 6%台であった。家族歴、肥満歴が無いので、2004年12月に抗 GAD 抗体を測定すると 19300 U/ml であり、その他の状況を合わせて緩徐進行 1 型糖尿病と診断した。その後も経過を観察していたが、抗 GAD 抗体は持続高値を示しており、現在も 6840 U/ml である。血中 CPR はグルカゴン負荷試験で 0 分 0.3 ng/ml、6 分 0.4 ng/ml と低反応で、内因性インスリン分泌はほぼ枯渇していた。1 型糖尿病では抗 GAD 抗体は発症後10年前後で陰性化することが多く、本症例のように内因性インスリン分泌能が枯渇しているにもかかわらず、13年経過してもなお強陽性を示していることは少ないため、貴重な症例と考え報告した。

はじめに

一般に、1 型糖尿病での抗 GAD 抗体は、発症早期では70-80%の頻度でみとめられるが、次第に抗体価が低下していき、発症後10年で陽性率が20%近くまで低下するといわれている¹⁾。しかし今回我々は、抗 GAD 抗体が発症後13年以上経過しても強陽性を示している高齢発症緩徐進行 1 型糖

尿病(以下 SPIDDM)の一例を経験した。本症例では13年以上抗 GAD 抗体強陽性が持続していると考えられ、かつ内因性インスリン分泌能が枯渇している症例であり、このような症例は報告が少なく、文献的考察を加えて報告する。

症 例

【症例】77歳男性

【主訴】自覚症状なし(血糖コントロール目的)

【現病歴】平成7年ごろから糖尿病を指摘され、平成12年からは当院に通院中であった。超速効型

Masayuki WADA

町立奥出雲病院内科

連絡先：〒699-1511 仁多郡奥出雲町三成1622-1